

第40回

うつのみやこども賞だより

令和5年度 8回

市内5・6年生の選定委員さんたちが、月に4冊の本を読んで、年間で一番人気の高かった本に「うつのみやこども賞」を贈っています。

《今月選ばれた本》

『ひと箱本屋とひみつの友だち』

赤羽 じゅんこ / 作 (さ・え・ら書房)

～読んだ本の感想より～



令和6年1月7日

読めは
愉快だ
宇都宮

宇都宮市立図書館

UTSUNOMIYA CITY LIBRARY

- 日本とか外国も、障がい者だからかわいそうだと思わないで、みんなが普通に接すればいいと思いました。
- 見た目による差別は無意識に消えないのだなと感じた。
- この本を読んで、今までは人を見ただけで判断していたけれど、人を見ただけで判断しちゃいけない。また、りりあは高校生にシンちゃんと言われたけど言い返して、すごいと思った。
- 障がい者の気持ちになって本を読むことができた。また、障がい者についてよく知れる本だった。
- ひと箱分だけ本屋のオーナーができるのがいいなと思いました。「この人は、わかってくれないかも」って思いこんで、勝手にバリアをはっていたのだ。のところに共感しました。
- 最初、朱莉は、理々亜を特別だと思っていたが、どんどん理々亜の特別だと思わなくなっていくという思いに気づき、私もこの本を読んでいるうちに、障がい者の人に出会っても普通に接することが大事だと分かりました。

『雪の日にライオンを見に行く』 志津 栄子 / 作 (講談社)

- アズは、自分の気持ちをはっきり言えるところが、勇気があると思いました。
- 最初、唯人はあまりしゃべらなかったけど、アズのことを冷やかすみんなに対して、自分の意見をみんなの前できちんと行って、唯人が変わってよかったと思いました。また、みんながアズに言っていることは、言っていることなのかを考えるきっかけになってよかったです。
- 文香は気の強い女の子だったけど、意外と優しいところもあったりするんだなと思いました。
- 唯人もアズも、お互いのおかげで成長しているなと思います。アズの親友のライオンの表現の仕方も、とてもよいと思いました。

『ぼくはうそをついた』 西村 すぐり / 作 (ポプラ社)

- 戦争や原爆などのつらい出来事が、まだ大きな傷になって残っている人がいたんだと思った。人を亡くすのは、とても重く、抱えきれないと感じた。
- 題名には「ぼくはうそをついた」と書いてあり、どんなうそをついてしまったのかなと気になりました。読んでみたら、リョウタがついたうそは優しいうそで、タツさんもそのうそで安心したのかなと思います。この話を読んで、私も広島の実験ドームに行ってみたいと思いました。
- 原爆や戦争についてもう一度考え直せた。戦争というのは、人の身体だけでなく心にも傷を与えていることが分かった。
- 戦争でたくさんの方が亡くなっていることを知って、戦争はよくないと思いました。

『すき、好き、スキ。』 イノウエ ミホコ / 作 (文研出版)

- 多種多様という事をこれまで受け入れられるのが難しいということですが、いろんな好きを否定せず、じゅうなんに受け入れる事は大切。
- 好きにもいろいろな“かたち”があって、おもしろいと思った。
- 男の子だから女の子が好き、女の子だから男の子が好きという固定概念は、そういう人を深く傷つけてしまうということが分かるお話だった。そんな人がいても、優しく寄りそえるワトがかっこいいと思った。
- ワトと胡汰、それぞれの考えや気持ちが書いてあって、すごくおもしろかったです。